誇るべき理念と個性をさらに強く打ち出していきたい

津田塾大学 学長
飯野 正子

いいの・まさこ氏

1966年　津田塾大学学芸学部英文学科卒業
同年7月　フルブライト奨学生として留学、Syracuse大学大学院歴史学科入学
1968年　Syracuse大学大学院歴史学科修士課程修了（MA取得）
1969年　津田塾大学学芸学部（英文学科）非常勤講師
1978年　同 専任講師
1981年　同 助教授
1991年　同 教授
2004年　学長就任
この間、McGill大学客員助教授、Acadia大学客員教授California大学、Berkeley校客員研究員などを歴任

1997年　カナダ首相出版賞受賞（『日系カナダ人の歴史』（東京大学出版会））
2001年　国際カナダ研究カナダ総督賞受賞

女性の地位向上のためには教育が不可欠であるという津田梅子の強い意志により、本学は1900年（明治33年）、「女子英学塾」として開校しました。女性の世に出る仕事がほとんどなかった時代に英語教員養成を目指したことは画期的だったと思いますが、さらに目を見張るのは、専門教育のみで良しとしなかったところです。言語を学ぶとは、すなわち文化や思想を学ぶこと、つまり幅広く教養を身につけることであり、そうしたall-round womenの養成（全人教育）が当初から梅子の念頭にあったようです。それはまるで今日の大学教育において「教養教育」の重要性が再認識されているのを先んじていたようでもあり、彼女の慧眼に驚かされるとともに、たいへん誇らしく感じることでもあります。

女子大学には「魔法の力」がある

女子大学から共学に転じる大学が多いためか、その可能性はないのかと問われることがあります。結論として本学にその意志はありませんが、女子大学の存在意義に世間の関心が向かうこと自体、決して不自然なことではないと私は思っています。

かつて女子大学の存在価値は「女性のリーダーを生む」ことだと考えられていました。男女共学のなかでは女性は遠慮をしてしまい、リーダーシップが育まれにくいという理由からです。しかし時代は変わりました。共学の大学からも女性の立派なリーダーが誕生しています。「女子大学」というだけでは、もはや優位性はありません。「女子大学」は個性のひとつであり、それ以外の個性も含め、トータルでどんな価値を提供できるか、それが問われているのだと私は痛感しています。

しかしながら、女子大学だからこその「すばらしさ」があることも私は信じて疑いません。それがなかなか言葉にならなかったのですが、2年前にハーバード大学初の女性総長であるファウスト氏と話をして、我が意を得たりと感じました。私は彼女に対して、「女子大学で過ごした4年間は、あなたのその後のキャリアにどんな影響を及ぼしましたか？」と尋ねました。彼女は津田梅子も学んだ、米国屈指の名門女子大学であるブリンマー大学出身者なのです。彼女は答えました。

「私はブリンマーで『自信』を得ました。私には『何でも』できる、そんな気持ちにさせてくれる大学でした。もし自分がハーバードの学部生だったら、怖気づいてしまって、図書館で調べ物をすることすらできなかったかもしれません」

私がずっと感じてきたのも、まさにこのことでした。女子大学は学生に「自信」を与えることができる。自立する力を育む、そんな魔法のような力が備わっているのが女子大学というところなのです。本学にもその魔法にかかって、自立し、大きな自信を得て社会に飛び出し、リーダーシップを発揮して活躍するOGがたくさんいます。法学部や芸術学部もないのに政治家になったり、弁護士になったり、芸術家として大成したり。そうした大いなるチャレンジ精神を、本学は“津田スピリット”と呼んでいます。「津田だからこそ」ともいえるし、「女子大学だからこそ」ともいえるこのすばらしき伝統を、私たちはしっかりと受け継いでいかなければならないのです。

企業や保護者の高い期待に応えたい

「女子大学」という個性以外にどのような個性をアピールしていくのか。本学が最も誇れるものは、基礎力を大切にしつつ、人間力を培う、質の高い教育であると思っています。宿題の量が高校時代より多いと嘆く学生もいます。ついていくのは大変かもしれませんが、学生がこの大学に満足感を覚えるのもそこなのです。学生にアンケートを取ると、大学時代に最も印象に残っているのは、仲間とともに一生懸命に「勉強したこと」。そしてもうひとつ、「教職員との距離の近さ」が良かったと言ってくれる学生が多いのもうれしいことです。津田梅子はアメリカのブリンマー大学へ留学した際、質の高い少人数教育に感銘を受け、本学に導入しました。「塾」という名にも、その想いが込められています。

このような特長を大切にし、磨きをかけながら、大学としてさらに発展していくために新たな動きも始めています。

例えば、多摩アカデミックコンソーシアム（TAC）という取り組み。東京・多摩地区にある国際基督教大学、国立音楽大学、武蔵野美術大学、東京経済大学、津田塾大学の5大学による大学協力機構で、各々の特色ある専門分野を相互に学べる仕組みをつくっています。本学の学生はけっこう積極的に学びに行っています。さらなる活性化のため、本学もいっそう努力したいと考えています。

2008年に本学は、東京・千駄ヶ谷に新キャンパスを開設しました。現在は、職業人を対象とした大学院のコースが開講され、教員の研究教育プロジェクトの活動にも使われています。また、「津田塾大学オープンスクール」や各種イベントにも使用しています。

津田塾大学の学長を任され日々感じるのは、社会からの期待の高さです。企業が大いに本学に期待してくださるのは、まぎれもなくこれまでの卒業生の力によるものでしょう。それ以上に学生の親御さんたちは、本学に対して強い期待と、とても良いイメージをもってくださっています。とくに入学式などでは、みなさんの熱意が強く感じられます。学生のみなさんや親御さんたちの大学への期待が大きいことは、大変、光栄なことですし、私たちにとっては心強い励ましにもなっています。大学をますます魅力的にし、十分に満足していただけるようにしなければならない、と日々、努力しております。

▶カレッジマネジメントTOPページへ戻る